
二元中継群像記

御厄

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

二元中継群像記

【Nコード】

N8843D

【作者名】

御厄

【あらすじ】

同じ人を愛してしまった、正反対の少女二人。噂の『惚れ薬』を用いて奮闘する二人を、二元中継する物語。

(前書き)

グループ小説第十七弾「プロットリレー(仮題)」参加作品です。
書く順番を決めて執筆者の前の人が、設定、登場人物、あらすじを
考えます。(最後の執筆者が一番始めに設定を考える)

本作は

原案：弥生 祐様

執筆：月朱 です。

天使小春は帰宅するなり、階段を駆け上がって自室に飛び込んだ。
小春は学生服のままベッドにダイブし、バクバクと拍動する心臓を握り拳で押さえる。

暫くして呼吸は静かになったが、心臓のドキドキは一向に治まらない。

小春は胸を押さえていた拳を開き、鬱血した手のひらの中にある赤茶色の小瓶を見やった。

彼女はほんのりと頬を上気させ、その小瓶を見つめる。

「買った買った……」

我知らず、咳きが漏れた。

「買った買った……惚れ薬」

小春は再び小瓶を握り締め、自分の胸に抱き寄せた。

「これで、朱斗先輩と……」

桐生弥生は帰宅すると、いそいそと自室に向かった。

鞆を勉強机の上に置き、自身はソファーに腰掛けた。「ふうう」と長い溜め息をついて、弥生は一息をつく。

「……我ながら、子供じみてるわね」

弥生は自嘲気味に微笑むと、制服の胸ポケットから何かを取り出した。それは手の平にすっぽりと収まる大きさの、赤茶色の小瓶だ。「買った買った……惚れ薬」

小瓶を窓から差し込む斜陽にかざし、中の液体をチャプチャプと揺らした。オレンジ色の光を顔に受け、弥生は口角を上げてニヤリと笑う。

「これで、朱斗を……」

小春は消極的な人間だ。

自身のありとあらゆる要素に確信が持てず、また実感を得られない彼女は、常に日陰に隠れて日々を過ごしていた。

そんな彼女だから、朝の通学の電車内で痴漢に遭った時は、抵抗も出来ずにただされるがままでいた。

しかも、定期的に。

おそらく、犯人は同一人物であろう。

痴漢や変質者の類は、対象となる女性に気弱そうな人物を選んだり、そういう人物を自然と感知したりするという。小春はその対象となる者の、典型と言えよう。

相手の思惑通り、小春は抵抗出来ずに、されるがままだった。

駅に着くまでの辛抱だと、歯を食いしばって耐えていた日々が続いたある日、

「こいつ、痴漢です!!」

と、痴漢の腕を捻り上げた少年が現れた。

逃れようとする中年の男を床に組み敷き、少年は間接技をキメて男を行動不能にさせた。それから次の駅で降車し、駅員に事情を説明して男を引き渡したのだ。

駅員二人に引きずられていく痴漢の背中を、小春はしばし呆然と眺めていた。ハッと我に返った小春は、慌てて少年に礼を言おうとした。

瞬間、

「ごめんなさい!!」

と、少年が最敬礼していた。

肩すかしを食らった小春は、少年に何で謝っているのかを問うた。すると、少年は悲痛な表情を浮かべ、こう言ったのだ。

「実は、少し前から君が痴漢に遭ってるかもって、思ってたんだ。

だけど、確証が無かったし、君に直接聞くのもあれだし……。なによりも、自分に踏み出す勇気が無かったんだ。今まで放っておいて、ごめんなさい！！」

一気にまくし立て、少年は再び最敬礼をした。

小春のために勇気を振り絞って行動を起こしてくれた少年は、しかし彼女に頭を下げていた。自分の行動が至らなかつたと、未熟だったと、ひたすらに謝罪している。

小春はお礼を言うのをすっかり忘れ、その少年に見とれていた。

この少年が朱斗先輩こと、月代朱斗つきしろ あけとである。

弥生は積極的な人間だ。

さらに言えば、自分という存在に絶対の自信がある少女なのだ。

容姿に自信がある。勉学に自信がある。運動に自信がある。言動に自信がある。思想に自信がある。

自身のありとあらゆる要素に確信を持ち、またそれを使役する術を知っていた彼女は、常に衆目の中に身を置く日々を過ごしていた。そんな彼女だから、異性との交際に関しても常に攻勢であった。

容姿が抜群に秀で、しかも名家の出身である弥生には、モーシヨンかける男性が後を絶たなかつた。彼女はそのことごとくを受け入れ、そのことごとくを拒絶していった。

弥生は楽しんでた。

自分に寄って来る男共を見下げ、振られた時の絶望の表情を拝むのが。

そんなある日、彼女はある少年に出会った。

いつも真つ正直で、馬鹿みたいに微笑んで、この世界に悪なんて無いと言つ風な顔をしている。その少年は、弥生の目から見てもキラキラと輝いていた。

一目で、弥生はその少年に惹かれた。

一目惚れと言えは聞こえはいいが、それは彼女の虐待心を満たす対象となると言う事である。弥生はその少年を見た時から、彼を自分の前に跪かせる事を夢想した。交際を快諾した時の、歓喜の表情そして利用するだけ利用して、ボロ雑巾のように捨てられた時の表情。

その時の少年の惨めな姿を想像し、彼女は身震いしていた。

辛抱堪らなくなった彼女は、自ら少年にアプローチをかけた。

内容は高圧的な物だったが、事実上それは告白であった。

しかも、弥生の人生上初の。

彼女はその行為は必ず成功すると信じて疑わなかった。なんせ、この自分との交際を断る男などこの世に存在するはずが無い。

そう信じていたから、少年が「ごめんなさい」と言った時は、一体自分が何を言われているのか理解できなかつた。

しかもその理由が、

「もしかしたら、好きかも知れない子が居るんですよ。自分、人を好きになったこと無いから、この気持ちが悪感情なのか分からなくて、モヤモヤしてるんですよ。こんな中途半端な気持ちを抱えたまま先輩とお付き合いするのは、とても失礼な事だと思っんですよ。だから、お気持ちは嬉しいんですけど、すいません」

という、いまいち要領を得ぬ内容。

彼はそれだけを言い残し、爽やかに去っていった。

一人取り残された弥生は、口をポカンと開けてその場に立ち尽くした。立ち尽くして、自分の中に明確な憤怒の感情が生まれるのを感じた。

人生初の告白を受け、それを断った。

その事実が弥生にとって屈辱以外の何物でもなかった。

この少年が朱斗こと、月代朱斗である。

そんな小春はある日、学校を席卷しているとある噂を耳にした。郊外にある開発途中で投げ出された住宅地に、露天商の男が居るといふ。その男は骨董品を扱っているが、それらと並んで『惚れ薬』という物売っているらしい。

露天商に話を聞いた生徒によれば、その惚れ薬と自分の血液を混ぜ、意中の人の体内に吸収させれば、たちどころに恋仲になれるといふ。

生徒の間では、これはよくある都市伝説として、笑い話になっている。

ただし、小春を除いてだ。

小春は惚れ薬の噂を聞くと、その日の内に行動を起こしていた。学校が終わるなり、彼女は件の住宅地へと駆けていった。

果たしてそこには、露天商の姿があった。クラスメイトが言っていた通り、ブルーシートの上に様々な骨董品が並んでいる。そしてその中に、小さな小瓶が。

小春はその小瓶に飛びつき、代金を払って逃げるようにその場から去った。

そんな弥生はある日、学校を席卷しているとある噂を耳にした。

郊外にある開発途中で投げ出された住宅地に以下同文。

ただし、弥生を除いてだ。

弥生は惚れ薬の噂を聞くと、その日の内に行動を起こしていた。学校が終わるなり、彼女は件の住宅地へと向かった。果たしてそこには、露天商の姿があった。クラスメイトが言っていた通り、ブルーシートの上に様々な骨董品が並んでいる。そしてその中に、小さな小瓶が。

弥生はその小瓶に飛びつき、代金を払って悠々とその場から去った。

翌日の昼休み、小春は屋上に居た。

朱斗は昼休みになると、購買部で買ったメロンパンを片手に屋上にやってくる。小春は、そこを待ち伏せしようという作戦を取ったのだ。

彼女は屋上に据え付けられた貯水タンクの影に隠れ、朱斗が現れるのを待った。

しばらくの後、鉄扉を開く音と共に朱斗が姿を見せた。

一人の女性を伴って。

「あの、先輩……。話って何ですか？」

気まずそうな表情を浮かべ、朱斗は弥生に問うた。どうやら、この前の告白の一件を、多少なりとも気にしているらしい。

その態度に不快感を覚えた弥生だったが、今は笑顔の下に隠した。

「大した事じゃないのよ？　ただ、この前の事を謝りたくて、ね」

「そんな、謝るのは自分のほ……」

「ああ、待って待って！！　湿っぼいのはお断りよ！！」

腕でバツの形を作り、弥生は朱斗を制する。

「今日はそういう話をしたんじゃないの、もっと前向きな話がないのよ」

「……前向き、ですか？」

怪訝な表情を浮かべる朱斗に、弥生は言葉を続ける。

「そう、前向きよ。この前はお互いにとって、とても残念な結果になってしまったわ。もちろん、私は貴方を諦めるつもり。でないと、貴方や、貴方の意中の人にも迷惑がかかるじゃない？」

弥生の言葉を聞く朱斗の表情は、複雑な物だった。どうやら、ま

だ罪悪感に苛まれているらしい。

これなら、丸め込むのは簡単だと、弥生は腹の中で笑みを浮かべる。

「だけど、このままだとお互いにバツが悪いじゃない？ 私達つてもっと良い関係になれないかしら？」

「良い関係、ですか？」

「ええ、そう。私達お友達になりましょう、朱斗君。そして、私に貴方の恋を応援させて」

弥生の口から飛び出した予想外の言葉に、朱斗は口をポカンと開けた。

「……ダメかしら？」

今にも泣き出しそうな表情を作った弥生に、朱斗はブンブンと首を振る。

「め、滅相もない」

「うん、良い返事だわ」

「でも、良いんですか？ 自分は先輩に酷い事をしたわけだし……」

「まったく、人の話を聞いていたの？ 湿っぽいのは嫌いだって言ったのに……」

言いながら、弥生は持っていた紙袋を朱斗に差し出した。

胸に押し付けられた袋に要領を得ぬといった風の朱斗だったが、漂ってきた匂いを嗅いだ瞬間、ハッと目を見開いた。

「こ、この匂いは……！！！」

「ふふ、無類のメロンパン好きである貴方なら、この匂いが分からない訳が無いわよね？」

朱斗はゴクリと喉を鳴らす。

匂いの正体は最寄り駅の前にある、パン屋の一番人気の商品であるメロンパンのものである。この逸品は一日三十個の限定販売で、朝一に並ばなければ手に入れることの出来ない代物である。

無類のメロンパン好きである朱斗は、通学時にその匂いに当てられ、いつも腹の虫を鳴らしていた。しかし学校がある朱斗は、後ろ

髪を引かれる思いで。その場を後にしていた。

その憧れのメロンパンが今日の前に在るのだ。

昼食をまだ収めていない朱斗の胃袋は、ウネウネと動いてメロンパンを欲した。

「せ、先輩……このメロンパンは……」

「あ、これ？ 仲直りの印よ、一緒に食べましょう」

最上の笑顔と共に送られた言葉に朱斗は、

「ご馳走様です」

あっけなく折れ、紙袋の中に手を突っ込んだ。それからメロンパンを取り出し、弥生に一礼してから頬張った。

幸福極まりないといった風の表情の朱斗に、弥生は図らずも頬が綻んだ。

小春は戸惑った。

いつも一人で昼食を取っているのに、今日という日に限って連れが居るではないか。しかも女性、しかも美人。

小春の顔がサツと青ざめる。

よもや、目の前にいる女性は恋人ではないかという考えが過ぎったからだ。もし予想通りなら、小春が今からしようとしている事は略奪愛である。恋人が居るのに、惚れ薬を使って強制的に振り向かせる……。

頭の中に生まれた後ろめたい思いを、首を横に振って追い出す。

彼女に引き下がるという選択肢は無い。ここで一步を踏み出さなければ、一生この鬱屈とした想いを抱えて生きていく事になるのだ。小春は意を決し、ポケットから何かを取り出した。それは三つに折りたたまれた鉄の筒で、一本に繋げると三十センチほどの長さになる。小春はその鉄筒に、惚れ薬を塗布した縫い針を装填した。

そう、これは吹き矢である。

朱斗とまともにコミュニケーションが取れない彼女は、吹き矢を使って遠距離から惚れ薬を使用しようと考えたのだ。

なんとアクティブでせこい作戦か。

小春は呼吸を整え、吹き矢の先を朱斗の首に向ける。

朱斗は眩暈を感じていた。

体調はすこぶる良い。しかし現に眩暈を感じる。原因は、目の前に立っている弥生である。

何故そのように感じているのか、原因は定かではない。しかし、彼の本能が、弥生に対して激しく反応しているのを感じる。

彼は、この感覚を知っていた。

「先輩……、自分……」

「なに？ 朱斗君？」

「自分、先輩の事が好きになったかも知れません」

「あら、それはとても光栄な事だわ」

弥生は笑みを浮かべ、ゆっくりと朱斗に顔を近づける。朱斗はそれだけで心臓の高鳴りを覚える。二人の顔が近づき、唇と唇が触れ合う瞬間……。

「でも、私はお断りよ」

弥生の顔が醜く歪む。そのあまりの豹変っぷりに、朱斗はびくりと肩を震わせる。

「せ、先輩？」

「貴方は私を辱めた。その貴方が、今度は手の平を返して睦事を口にするの？ 笑わせるんじゃないわよ！！」

語気を荒げる弥生の声に、その剣幕に、朱斗は顔を青ざめさせる。

「あの、先輩、自分はどうすれば……」

「謝罪しなさい」

「謝罪ですか？」

「そう、謝罪よ。私をコケにしたその罪を、全身全霊を以って償いなさい」

喉から短い悲鳴を上げ、朱斗は二、三步と後ずさる。そして、彼はその場に跪いた。許しを請うように、額を床に擦り付けた。

「ふふ……、いい気味」

サクッ

小春は肺腑に力を込め、勢いよく息を吹いた。

惚れ薬を塗った針は過たず、朱斗の首筋へと飛んでいく。空を切り裂き邁進する針が、彼の首に刺さらんとする。

刹那、彼は動いた。

膝から崩れるように地面にひれ伏したのだ。

標的を失った針はそのまま直進し、朱斗の正面に立っていた女性の額にクリティカルヒットした。

許しを請った朱斗が恐る恐る視線を上げると、そこには額に針を刺し、ドクドクと血を流している弥生の姿が。

「せ、先輩!？」

「……………」

「先輩血が出てますよ!？ 早く保健室に行かないと!！」

「……目が覚めたわ」

「はい？」

要領を得ぬといった風の朱斗に、弥生は視線を合わせる。その目は、キラキラと輝いていた。

「私は目が覚めたわ……。男をたぶらかし、弄んで、自分の虐待心

を満たしていたけれど、そんなのは愛じゃない！！ 真の愛は、私の心を占有している、名も知らない少女！！」

天啓でも降りたように、弥生は声を上げる。それから自分の肩を抱き、恍惚とした表情を浮かべた。

「嗚呼、会いたい。会いたいわこの少女に……。今すぐに！！」

「あの、先輩自分は……」

「ええい、邪魔よ！！」

弥生は朱斗の頬を勢いよく叩く。

「はうあうは」

朱斗は痛がつてるのか喜んでいいのかよく分からない声を上げ、その場に倒れた。

地面に頭を打ち付けた朱斗には目もくれずに、弥生は勢いよく屋上を飛び出して行った。

「先輩、大丈夫ですか！？」

状況はよく分からないが、一緒に居た女性に張り倒された朱斗を、小春は優しく抱き起こす。

彼女の腕の中で、朱斗は呻き声を漏らす。

「あ……れ？ 小春ちゃん？」

「はい、私です。大丈夫ですか、先輩？」

小春の力を借り、朱斗は上体を起す。それから、ガツクリと肩を落とし、長い溜め息をついた。

「僕の気持ちは、届かなかったみたいだ……。そうだよ、一度、僕は彼女を拒絶したんだから」

小春には、何かなんだか分からなかった。分からなかったが、目の前で憧れの先輩が落胆している様を見て、放っておける分けがなかった。

「その……。状況はよく分からないんですけど、先輩なら大丈夫だ

と思います。優しいし、行動力があるし。先輩があの人に変な事をしてしまったのであれば、謝ればいいと思います」

「でも、僕は拒絶されてしまった……」

「それでも謝ればいいと思います!!」

平素では見られない力強い小春の表情に、朱斗は呆気に取られてしまった。呆気に取られて、クスリと笑った。

「強いんだね、小春ちゃんは……。どうやら、誤解していたらしい」
「……恐縮です」

縮こまった肩をポンポンと叩き、朱斗は立ち上がった。

「うん、そうだ。そうだよ。謝ればいいんだ。許されるとか、許されないとか関係ないんだ」

よしつと気合を入れて、朱斗はその場を後にした。が、すぐに戻ってきて、小春に紙袋を差し出した。

「はい、これ。良かったら食べてよ」

「あ、あの、よろしいんですか?」

「感謝の気持ちだよ。それに、恥ずかしい所を見られちゃったしね」
肩をすくませ、朱斗は小春の胸にポンと紙袋を投げた。それから小さく手を振り、爽やかに去って行った。

後に残された小春は暫しその場に立ち尽くし、小さく溜め息をついた。

「はあ……。失敗しちゃった」

呟いてから、彼女はハツとなった。

「ああ、いけない弱気になってる! だからダメなんだ私は! 惚れ薬はまだ残ってるんだから、リトライしなきゃ!」

自分に喝を入れ、小春は再びの挑戦を胸に誓った。

そしてその景気づけに、朱斗から貰った物、限定品のメロンパンを勢いよく頬張った……。

(後書き)

次の作品は

原案：月朱

執筆：春野

天使様です。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8843d/>

二元中継群像記

2008年11月7日09時17分発行